

# 森の木魂（こだま）

2023年4月24日発行 第10号

## 目次

・巻頭：5月27日シンポジウム……………1	・森の仲間たち：小口一郎展から勇気をもらおう……………10
・足尾発：足尾「エコ散歩」への誘い……………2	・心のふるさと探し：足尾銅山の閉山50年に想う！……………11
・特別寄稿：石炭火力発電所の建設中止を求めて……………6	・ミノムシ……………12
・追悼：青木淳一先生を偲ぶ……………8	・編集後記……………12
・南相馬発：鎮魂復興市民植樹祭に向けて……………9	



## 5月27日のシンポジウムでお会いしましょう。

3月20日、国連のIPCCは最新の報告書を公表しました。2020年までの10年間で世界の平均気温は1.1℃上昇していることを示し、「人間の活動が主に温室効果ガスの排出を通して地球温暖化を引き起こしたことは疑う余地がない」と人類の影響を指摘、大幅なCO2排出削減対策の必要性を強調しています。そして、「この10年間の対策が数千年先まで影響する」と、熱波や豪雨をもたらす気候危機がすでに世界各地で起き、自然や人間に深刻な影響を与えていることをこれまで以上に強く警告しています。

大気や海洋などの広い範囲での急速な変化は、日本も直撃しています。海水温上昇は海藻の減少、魚貝類の生息地の変化を引き起こし、年々激しくなる豪雨は、河川の増水、氾濫、土砂崩壊を引き起こし、住宅や田畑・果樹園に被害を与えています。また、労働現場では体温よりも高い気温下で働かなくてはならず、農漁業従事者や労働者、市民の生活の糧が奪われ、生存に対する不安は増すばかりとなっています。まさに、地球温暖化防止は“待ったなし”どころではなく“崖っぷち”に立たされています。

昨年11月に開催されたCOP27では石炭火力発電の廃止や化石燃料の段階的な廃止は合意されず、二酸化炭素排出に歯止めがかかりませんでした。合意されたのは途上国の損失と被害を支援する「基金」の新設です。大量に排出してきた先進国が年々巨大化する異常気象の猛威にさらされる途上国の被害を無視することが出来なくなったからではないでしょうか。さらには、新型コロナウイルスの世界的

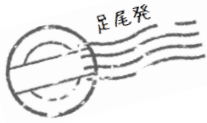
流行による先進国の経済停滞の立て直しと、ウクライナ（+欧米）とロシアの戦争遂行の為の武器生産と輸送に欠かせないエネルギー確保が優先されたことが背後要因にあると思います。実際にCOP27の会議場には世界の主要国の化石燃料企業関係者600名以上がロビー活動をしていたといえます。

5月27日に開催する“地球環境危機下で「いかに生きるか」を考えるシンポジウム”では、パネラーとして生活現場と労働現場の方々から、現場で起きている気候危機の現状を語っていただき、未来を生きる子供や若者たちの声に耳を傾けたいと思います。

今年1月、神奈川県横須賀市で進められている石炭火力発電所の建設を巡り、住民が不漁や土砂災害など温暖化の被害を訴えていた訴訟の判決が東京地裁で出され、残念ながら訴えは退けられました。当日、裁判の傍聴をしましたが、たった3分で閉廷するなど、やましさを感じざるを得ません。オランダでは最高裁が「すべての国民にとっての人権侵害」と断じ、ドイツでは連邦憲法裁判所がCO2削減目標を定めた気候保護法の一部を違憲と判断するなど、画期的な判断がされています。日本でも実現をさせるために連携をしていきたいと考えています。

巨大化し毎年頻発する異常気象は他人事ではないこと、そして、異常気象と向き合っていくための生活はどうあるべきか市民、そして会員の皆さんと共に考え創造していきたいと思います。皆さんの参加をお待ちしています。

運営委員 小林敬



## 足尾祭

### 煙害で廃村になった草地に育つ森を散歩しませんか 夏から始める足尾の「エコ散歩」へのお誘い

「厳しい環境で生き物は実力を発揮する。一番困難な地で森が出来れば世界のどこでも森ができる」と言っていた故・宮脇昭先生と現地に立った2004年。翌年から足尾・松木村跡地の草地にふるさとの木々を植えてきた私たち。

「白沢の森」と名付けた急斜面の草地には、以前植林した幼木を添えていた支柱の竹が刺してあり、まるで墓に供えてある卒塔婆のようでした。森づくりは、多くの植林ボランティアと黒土や腐葉土を背負い揚げ、穴を掘り、ハゲ山になる前には生えていただろう苗木を混植・密植しました。頂上に向かって苗木を植えていくため階段を造り、今では600段にもなりました。生きものたちの棲みかに木を植えるので、木々を生長させていくには生きものたちとの知恵比べでした。少しでも森の手入れを怠ると、幼木の葉や樹が食べられてしまいます。

2009年以降は緩斜面の草地を古河機械金属株式会社様から借り、「松木の杜」、「新松木の杜」、「民集の杜」と名付けて植樹を行ってきました。この土地の一か所の植樹は、「白沢の森」のように穴を掘り、そこに黒土等を混ぜて密植・混植してきました。その他の二か所の植樹は、草と岩や石ころを重機で掘り起こし、開墾した地に黒土等を混ぜ合わせて密植・混植してきました。植林ボランティアの皆さんは、栃木県や群馬県、神奈川県の小中高生やアジア・アフリカからの荒廃地植生回復研修生(JICA研修)、米・ミシガン大学生、労働組合の組合員・家族などの方々でした。



民集の杜：桐生ローターアクト（2018年）

一本の木もない荒地と言っても過言でなかった植樹地は、植林ボランティアの情熱に応えているかのように、森の下の森の生きものたち（ミミズやササラダニ等の土壌分解動物）に支えられ木々が元気に生長しています。また、風や虫たちの働きによってネムノキ、ヤマナラシ、ヤナギ、コウゾ等が新しく森の仲間に加わっています。林床にもシログナスミレ等のスマイレの仲間、ヤマユリ、苔類などが命を繋いでいます。

この森は、新緑時に黄緑色の輝き、若葉の森を住処にする生きものたちの息吹き、秋になればカエデの紅色、クヌギの黄金色の輝きなどが森作業を行っているスタッフたちの疲れを和らげ、気持ちを癒してくれています。廃村に追い込まれた村人の森に寄り添う暮しの様子が目に浮かびます。

人間が壊した自然は人間の手によって回復させなければならぬと思います、森を育てている私たち。今、地球温暖化による異常気象は世界各国の人々の生活を脅かしています。私たちはこれからも命を守るエコシステムに寄り添って生活ができることを願っています。そのヒントが森の散歩で見つけられないかと思い、「エコ散歩 in 足尾」を準備しています。



民集の杜：樹徳高校（2018年）







フデリンドウ（民集の杜）

### 「エコ散歩 in 足尾」のコース

これまでの森の名称は「白沢の森」、「松木の杜」、「新松木の杜」、「民集の杜」にしていますが、森を散策するために分かり易く急斜面の「白沢の森」と「民集の杜」の二つに統一しました。それぞれの入口には、大きな岩を置き岩に森の名前を刻み込みます。

コースの基本は各森・杜毎に行いますが、四季折々の木々の美しさ、季節ごとの生きものたちの息吹き等を体感できるように考えています。夏から秋にかけては草木の実で味覚を楽しめることもできるように準備しています。また、散歩では、旧松木村の村びとが森に寄り添っていた生活を思い描いてみながら、森は大切な友だちであることを感じ取っていただければ幸いです。

散歩時間は参加者の希望に応じて対応していきますが、休憩時間をいれて最低3時間は必要です。散歩の参加費は無料です。散歩に植樹や草刈り等を取り入れたい方は必要経費がともないます。足尾ダム集合・現地解散ですが、アクセスに関しては相談に応じます。



### 「エコ散歩 in 足尾」案内のポイント

#### 📍 民集の杜・北

ポイント1 ヤマナシ：梨の原形といわれている木です。この木は、栃木県鹿沼市南摩町の集落で半世紀以上も集落民の心を癒してきたと言われていいます。ダム建設により湖底に沈んでしまうことになり、その実の種から育てました。集落民の心の癒しを宿している貴重なヤマナシと思っています。

ポイント2 野木町煉瓦窯保存会の皆さんは渡良瀬遊水地に生えている桑の木の実から育ててくれた桑の木が苗木が植えてあります。穴を掘っただけの「民集の杜・西」に植えた桑の木は全滅しました。「民集の杜・北」の桑の木は元気に育っていますので、その違いを語り合う場所になっています。

#### 📍 民集の杜 東

ポイント1 初夏に花を咲かせるシロガネスミレ。小さなスマレの命の営みの不思議を体感していただけます。風や生きものたちの動きによって、ヤマナラシ、ネムノキ、コウゾ、ヤムユリ等が森の間になっていることを感じていただけます。

ポイント2 秋になると松木川沿いの一部はカエデの紅葉とヤマナラシの黄色い葉が混じり合います。私たちは“モミジ平”と呼んでいますが、そこから見る黒々とした岩肌の足尾グランドキャニオン(松木川上流)の景色から、自然の逞しさを感じとっていただきたいと思っています。



シロガネスミレ（民集の杜）

## 民集の杜 西

ポイント1 この杜には13種程の苗木を植えました。元気に育っているのは数えるほどです。早春には小さなコブシの白い花とその香り、秋になるとクヌギとコナラが黄金色の葉を輝かせ、栗の実はツキノワグマに元気の素を恵んでいます。

ポイント2 「主役の木はクヌギ」と思うほどにクヌギが多く、その木の枝に目立つのは天蚕の繭。今では高価で貴重な繭ですが、薄い黄緑色の繭を手にとると、松木村民の生活の糧を奪ってしまった行き過ぎた人間活動を考えさせられます。

ポイント3 夏、森の林床には緑色の苔が目をはびこります。土壌と動物たちの排泄物と関連しているかもしれませんが、センサーカメラで動物たちの動きを観察しています。松木川沿いには半世紀以上の草地が残されていますので、草地と森の違いを見つけてください。



ミツマタ (みちくさの庭)

## 白沢の森

ポイント1 急斜面の草地で森の手入れをしている18年間の足跡を思い描いていただくと幸いです。新緑から紅葉の時期には「M&m ベンチ」に座って、木々の多機能を体感してください。

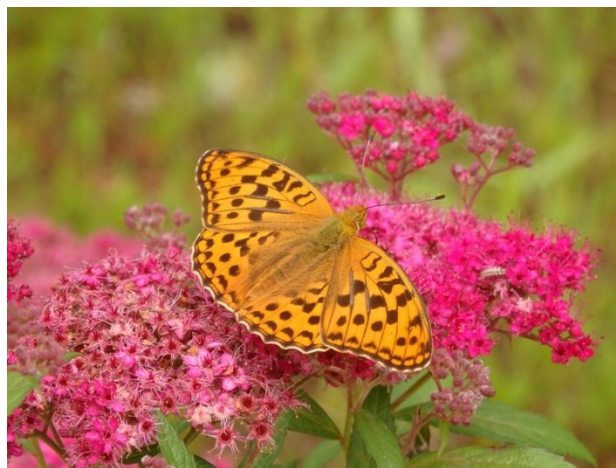
ポイント2 森の入り口付近には落葉樹林内にひときわ目立つ照葉樹のアラカシとシラカシがひっそりと生長しています。植樹を始める前の2004年、故・宮脇昭先生と私たちは足尾町の植生調査を行いました。街の一部には照葉樹が生えていたため、試験的に植えた木々です。

ポイント3 秋から冬のこの森は紅葉の隙間から見下ろす松木沢の景色と鹿の遠吠えを聴き、山が眠に入る時にはふかふかの落葉の絨毯が敷かれた階段を歩いてみてください。



散歩コースと案内ポイントは参加希望者のリクエストに応じて実施していくようにします。私たちは、森の手入れのほかに「みちくさの庭」の手入れをしています。早春はミツマタの黄金色した花の輝き、夏は野イチゴとブラックベリーを採って、甘酸っぱい野生の実の食感を味わえます。水溜りには、水生動物が静かに命を育てています。秋にはヒガンバナの赤い色がひっそりと咲いています。森づくりサポーター、スタッフが心を込めて野草を中心にした庭を目指しています。

庭の近くには、「みちくさテラス」と称して、大谷石と木のテーブルと椅子を設置しています。コーヒーでも飲みながら、弁当などを食べながら四季折々の静かなひと時を過ごすことができます。自由にご利用ください。



シモツクとヒヨウモンチョウの仲間 (みちくさの庭)



## 足尾・松木村跡地にオオムラサキが舞う

私たちは、足尾銅山跡地の荒廃地で自然と人間のかかわりとその歴史を学んでいます。合言葉を“山と心に木を植える”にして活動をはじめてから 2025 年で 20 年になります。

私たちの願いは、松木村を去らなければならなかった村びとが、森に寄り添って生活してきたその心得と備えを、将来社会へ活かしていきたいということです。以前、旧松木村の子孫から「オオムラサキ里山を飛び回っていた」、「トキを鉄砲で撃っていた気がする」等の話を聞きました。

その話を伺い、トキが飛来するには無理だとしてオオムラサキをこの地で乱舞させたいと、その試み始めました。山梨県北斗市のオオムラサキセンター・跡部さんの仲間たち、栃木県那須塩原市の拓陽高校の生徒の皆さん、そして群馬県の阿部さんのアドバイスを頂き、エノキとクヌギを植えました。ク



ヤマユリ（民集の杜）

ヌギは「民集の杜・西」の主役のように生長していますので樹液の心配はないと思います。エノキは鹿や猿に梢を食べられるという害に何度も遭いました。その都度の手入れに応じてくれたエノキは 3メートル程に生長しています。と言ってもオオムラサキの幼虫と成虫の生息環境が良くない森に移動することは危険すぎるのではないかと考え、大きなビニールハウス内にクヌギとエノキを移植し、3年が経ちました。ハウスの天井はネットを張り、地には落葉を積もるようにしてきました。オオムラサキの生息地を「民集の杜」にするのは 2025 年を目標にしていますので、今年から 2 年間はハウス内の生育に集中することにしています。

当時の村びとはこのようなことはしていませんでしたが、オオムラサキが乱舞していた様子に村びとの心は躍ったのではないかと想像したいです。そのための森の手入れは日常生活の当たり前のことでもあったかと思います。

夏のビニールハウスにはオオムラサキの姿が見られるかもしれません。スタッフ・サポーターも楽しみにしています。その時々情報はホームページ等で公開していきます。読者からのアドバイスをお待ちしています。「エコ散歩 in 足尾」の本格的スタートは 2025 年になりますが、多くの皆様からのアイデアやアドバイスに頼りながら、将来社会を生きる私たちの心を豊かにしていければと願っています。

「エコ散歩」東京都版と足尾版で実施予定ですが、南相馬市の森の防潮堤の森、宮城県の森の防潮堤の森でも実施できるように話し合っています。

足尾森づくりリーダー 大野昭彦



特別寄稿

横須賀石炭火力発電所の建設中止を求めて闘う住民たち



2016年、横須賀市久里浜に130万キロワットもの大規模石炭火力発電所の建設計画が浮上しました。計画地となった場所は1960年代に建設された東京電力の石油火力発電所があり、老朽化のため2010年以降は長期停止で稼働しておらず、いずれは閉鎖すると言われていました。不動産屋からそう言われ、計画地のすぐそばを永住先として決めたという方もいます。東京電力が新規建設計画をするための環境アセスメントに着手した2016年、多くの住民たちには再びその地に新たな石炭火力が作られることすら知らされずに着々と環境アセスメント（アセス）は進んでいきました。

また、この計画は、環境影響が現状よりも「低減」する「リプレース案件」だとして、国のガイドラインにのっとりアセスの手続きが簡略化され、大気汚染や温排水の影響などについて評価を行わず、通常よりも短期間で進みました。しかし、環境影響が本当に「低減」しているのでしょうか。旧火力発電所は2010年以降ほとんど動いていないので、現状は火力発電所の周辺は発電所からの汚染がない状態が

続いていたこととなります。CO2排出に関して言えば、実際石炭火力は石油火力よりもCO2排出係数が高く、また、SOx排出量なども発電所がほとんど稼働していなかった直近に比べればかなり増え、実質的には環境影響は低減どころか悪化するような計画だと言えるものです。

アセスの途中で石炭火力発電所建設計画の事業主体が東京電力からその合弁会社であるJERAへと引き継がれました。そして国は2018年11月、確定通知書を発行しました。これが事実上の国の建設認可となって、JERAは石炭火力発電所の建設に着手します。

この間、計画を知った住民たちは、地域で繰り返しセミナーを開催し、石炭火力の問題点を学ぶ機会を設けました。気候危機の深刻さ、石炭火力の甚大なCO2排出量、時代は火力ではなく再エネで十分賄えることなど、石炭火力の建設に対して疑問を呈し始めます。そして、建設中止を求める署名、アセスにおける意見書提出や公聴会での訴え、様々な形で建設を白紙に戻すよう訴えてきましたが、事業者



側は全く聞く耳を持ちませんでした。折しも、国際社会では、気温上昇を産業革命前に比べて 1.5°Cの上昇にとどめるカーボンバジェットを鑑み、2020 年以降石炭火力を新規で動かしてはいけないという国連からの強い要請が発せられている時でした。

2019 年 5 月、住民ら 45 名がこの計画のアセスで確定通知を出した国に対して、その違法性を訴えて提訴に踏み切りました。さらに、その後 3 人の漁業関係者らが原告に加わり、全 14 回におよぶ口頭弁論期日が設けられ裁判が進みます。後半の数回の期日では、数名の原告から口頭陳述も行われ、近年の異常気象による豪雨被害、大気汚染による喘息疾患の深刻さ、海水温上昇による壊滅的な漁業被害など危機迫る陳述が続きました。

こうした訴えにもかかわらず、2023 年 1 月 27 日、東京地方裁判所は原告の訴えを退ける判決を下しました。判決では 48 名の原告のうち、横須賀市を含む三浦半島 5 市町（横須賀市、三浦市、逗子市、鎌倉市、葉山町）在住の原告の請求を棄却、それ以外の横浜市や千葉県などに在住する原告に対しては原告適格を認めず請求を却下しました。原告と弁護団は

この判決を不当だとして、控訴しています。

横須賀石炭火力発電所が計画された 2015 年は、パリ協定が締結され、世界の平均気温の上昇を産業革命前から 2°Cを十分に下回る水準に抑制し、1.5°Cまで抑制することに努力するとの国際合意ができた年です。世界が大きく気候変動対策を加速しようという中で、稼働すれば 726 万トンもの CO2 を毎年排出し続けるこの計画は進められてきました。それにもかかわらず、本計画と国の対応の不当性に日本の裁判所は全く向き合なかったのです。

世界では、同様に気候変動の被害者が排出事業者や国を訴える気候訴訟が数多く展開されています。そしてこうした裁判において多くの裁判所は気候変動の被害を正面から受け止め、政府や企業（事業者など）に対して具体的でより厳格な削減目標や削減計画の策定などを求める判決を次々と下しているのです。今回の日本における判決は、世界の潮流から外れた日本の司法の問題を浮き彫りにしたと言えるでしょう。

気候ネットワーク東京事務所長 桃井貴子

## 気候ネットワーク <https://www.kikonet.org/>

地球温暖化防止のために市民の立場から「提案×発信×行動」する NGO/NPO。ひとりひとりの行動だけでなく、産業・経済、エネルギー、暮らし、地域等をふくめて社会全体を持続可能に「変える」ために、地球温暖化防止に関わる専門的な政策提言、情報発信とあわせて地域単位での地球温暖化対策モデルづくり、人材の養成・教育等に取り組んでいる。地球温暖化防止のために活動する全国の市民・環境 NGO/NPO のネットワークとして、多くの組織・セクターと交流・連携しながら活動を続けている。2015 年、森びとが都内で開催した「ストップ！地球温暖化 森と生きる暮らしを考えるフォーラム」では、浅岡理事長にパネリストとして登壇頂いた。

## 青木淳一先生を偲んで

### 驚愕：土壤動物の存在を学ぶ！

「畑におしっこしてミミズにかかるとおちんちんが腫れるぞ」と子供の頃におふくろから言われ、ミミズが畑の土を改良してくれていることは知っていた。また、落ち葉が毎年森や山道に堆積して人が通れなくなったということも聞いたことはなかった。その謎は、森びとインストラクターを受講し青木淳一先生の土壤動物（ムカデ、トビムシ、ササラダニ等）の存在・役割を学んで解けた。

とにかくダニと言うのは、非常に誤解をされていて、聞いただけで身体がかゆくなるという人があるのだが、実は世界中に6万種もの名前がついているダニがいる。日本には1959種いて、そのうちで人間だけに寄生する種類は2種類で、それ以外は大自然の森の中に住んでおり動物の血は吸わない。誰も研究・調査してこなかったササラダニは、実は生態系・生物の根本、植物の根幹にかかわる存在なのだ。落ち葉などの有機物を分解するササラダニ類の仲間は自然の豊かな森になればなるほど多くが見つかり、森林の環境破壊の度合いなどを知るための指標生物となっている。先生は中学1年生の時、自由研究の中でヒノキ林のササラダニの新種を発見後、出先で収集した腐葉土を持ち帰り調査・研究するようになったと聞く。その姿勢には凄く奥深いものがあり感動した。

併せて、生物群集について学んだ。「生産者」「消費者」「分解者」の三者で構成されている。生産者とは、太陽エネルギーを使って、炭素、窒素、リン、カリウム、水などの無機物から炭水化物やタンパク質などといった有機物を創り上げる生物のこと。生産者の概念に当てはまるのは植物だけで、悔しいかな人間を含めた全ての動物にはそのような能力はない。

生産者が無機物から合成して創った有機物（葉、枝、幹、根、花、果実など）に依存し、それを食べて生きている物を消費者。生産者である植物も、消費者である動物も、やがては死んで地面に落ちる。この生物遺体を分解して掃除をしてくれる分解者。分解者は全て微生物とされ、菌類（カビ・キノコ）と細菌類（バクテリア）である。

私は先生から学んだことから、家の小さな畑で生ごみの分解がどのように進むのか2~3か月かけて調査してみた。カラスや猫にかき回されない様に工夫して行い小さな野菜や穀物類は、約3週間で分解され土に還っていくことが分かった。ただ、卵の殻などは2~3か月では分解されないことも分かった。それにしても土壤動物の働きは凄いものがある。

森づくりで重要なのは土である。木を植える土壌にはミミズを始めとする土壤動物が作ってくれる豊かな土が必要な事を学んだ。特に生物多様性と生態系を知ることは、森づくりには欠かせない事だった。

私たちは土壤動物をはじめとする森に生かされていることを忘れてはならない。森に寄り添って生きて行かなければならない。土の中の大切な生き物を教えてくれた天空の青木淳一先生に合掌。

事務サポーター 松井富夫



ケタバナダニ（5点）

青木淳一先生が足尾の土壤調査をして報告されたダニの写真。点数は、環境評価のため先生が付けたもの（1点~5点）。先生は土壤動物を用いた環境診断を考案した。



第 11 回南相馬市鎮魂復興市民植樹祭に向けて



去る 2 月 27 日、南相馬市保健センター会議室において、第 2 回実行委員会が開催され、来たる 6 月 11 日（日）に第 11 回南相馬市鎮魂復興市民植樹祭が開催されることが決定しました。

開催地は、原町区北泉地内で開催規模は植樹面積 0.4ha、参加者約 2,000 人、植樹本数約 20,000 本となっています。

私たち、南相馬市鎮魂復興市民植樹祭応援隊は 2015 年に当時の NPO 法人森びとプロジェクト委員会の協力によって発足しました。南相馬市では東日本大震災の大津波によって 636 名の方々が亡くられました。その亡くなった方々の鎮魂と地域の復興のために現在、海岸防災林再生のため「命を守る森の防潮堤づくり」に取り組んでいます。来年には結成 10 年目を迎えることになりました。

現在、会員は 17 名で平均年齢が 60 歳代後半になり高齢化していることから、今後の活動についても考えなくてはならない状況になってきています。原町区育苗場には現在 5 種類約 1,000 本の苗木を育苗しています。夏の暑い日には炎天下で約 1 時間作業となるため肉体的にも大変であったことから、今

まで植樹をしてきた植樹会場の除草作業や枝払い作業などの維持管理に作業シフトを変更してくることに、3 月 26 日に開催した第 9 回総会で決定しました。

昨年 11 月に開催された足尾のふるさとの森の観察会に参加して、足尾の猛者の皆さんから森の案内をしていただきました。南相馬市でも今まで 10 回行った植樹会場でも「森の案内」を出来るようにしていきたいとの話になり、現在「森の案内」が出来るように内容等を検討しているところです。

今回の植樹祭は、従来と違い森びとプロジェクトの方々の前泊での植樹サポート研修には参加せずに、当日の植樹祭に参加し、終了後に第 1 回植樹祭会場の除草作業をして、翌日に生育の良い第 2 回、第 3 回植樹祭会場の「森の案内」をしていきたいと思えます。

会員の皆さん、是非第 11 回南相馬市鎮魂復興市民植樹祭に参加して下さい。南相馬市民と一緒に 20,000 本を植樹し、少しでも地球温暖化防止のために森林による CO2 吸収率を向上させようではありませんか。どうぞお待ちしております。

南相馬市鎮魂復興市民植樹祭応援隊事務局 岩橋孝

## 森の仲間たち

### 版画作家・小口一郎展から勇気をもらう



2月下旬、私に向かって人差し指を向けて怒っているような顔をした版画が目にとまった。そのチラシには、「二つの栃木」の架け橋「小口一郎展～足尾銅山鉍毒事件を描く」と印刷されていた。美術館が好きな私にとっては、即、「見に行くぞ！」となり、友人を誘って栃木県宇都宮市へ向かった。即決して美術館に向かった訳は、足尾銅山跡地で森づくり活動をしている「森びとプロジェクト」の植林ボランティアの経験があり、その時に足尾銅山の歴史を少し学んだからである。

観覧する前の知識を得ずに小口さんの版画を観た。怒った表情の髭面の顔は「鉍毒に追われて」（連作）の中の田中正造だった。命を削り、煙害と鉍毒に苦しむ農民と共に、明治政府と官憲と闘った闘志の顔だった。この顔の作品は忘れられないものになった。

館内では、1950年頃の風景画、鉄道機関区、石切り場、煉瓦工場などの労働現場の作品に引き込まれた。「足尾銅山」に関する作品では、1960年「波紋」、1968年「赤い月」が印象に残り、1969年から1970年代に入ると足尾銅山に関する連作の「野に叫ぶ人々」、「鉍毒に追われて」、「盤圧に耐えて」が良かった。これらの連作には説明文があり、作者の意図が理解できて良かった。心して作者

の気持ちに迫る鑑賞をするにはまる一日を要すると思った。

作品には、国家権力者によって足尾銅山から追われて北海道に「移住」した人々の過酷な環境に苦しむ版画もあった。恥ずかしながら、この事実は初めて知った。これら多くの作品は、1970年代に描かれた作品である。小口さんは、足尾銅山坑内の苛酷な労働や労働者の抗議と抵抗闘争等を主体化し、版画を通じて、それを未来に継承しようとしているのではないかとの意志が作品に滲み出ている。そんな気持ちで作品を観ていると、あっという間に当時の労働者や農民の心に引き込まれてしまう。労働者、農民、学生そして市民の固いスクラムによる世直し運動が社会悪に思われがちな現代社会においては、この版画の持つ迫力はシニアの弱者の私には勇気と元気の素になった。作者の気持ちを広めたい方には、素敵な「図鑑」の購入を勧めたい。このような機会をつくってくれた栃木県立美術館の皆さんに感謝です。

刺激的な作品を観た後は空腹になった。駅前の餃子店で餃子を肴にして酎ハイを呑んだ。そこでは、課題は小口さんのメッセージを千葉県内でどうするか、となった。

千葉県正会員 石井俊郎



## 心のふるさと探し

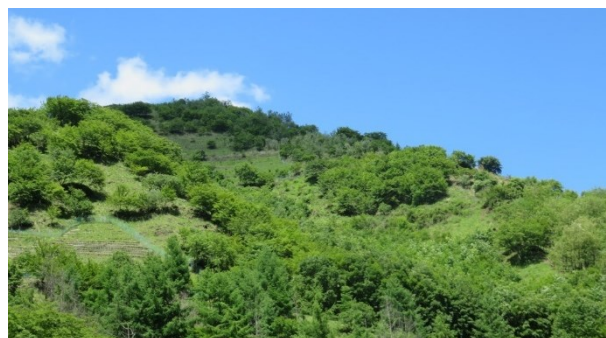
### 足尾銅山の閉山 50 年に想う！

足尾銅山閉山 50 年の今年。煙害でハゲ山になった松木川上流に雷雨が襲ってくると、赤茶色の水が恐ろしいほどの勢いで松木川を濁流にします。国と栃木県は 1960 年頃から本格的な治山・緑化事業を行っていますが、その煙害の爪痕は今でも痛々しく残り、温暖化による異常気象と重なり合って、岩肌張り付いている土砂と草木が大雨に流されてしまうのではないかと心配になっています。

私が木を植えて森を育てている地はこの一角です。半世紀経っても人間が手入れをしないと外来種の草に覆われている地も残っています。旧松木村の跡地での森の手入れをということもあって、私の思いは生活の糧を奪われた村民の気持ちを持ち続けようと思っています。廃村になる前の村人の唯一の現金収入源は養蚕であったと聞いています。その蚕の餌であった桑の木が枯れてしまった悲しさと怒りに思いを馳せ、私たちの森のひとつである「松木の森」に桑の木を植えました。今から 10 年も前になりますが、神奈川県で着物の着付けをしていた H さんが、村人の気持ちになって 100 本の苗木を用意してくれました。草地に掘った穴に黒土と腐葉土などを混ぜた地にその苗木を植えました。その後は、草刈り等の育樹活動を続けましたが、その苗木は全滅しました。

その後、草と岩や石をすべて掘り起こした「民集の杜」には、渡良瀬遊水地内のヤマグワの実から育てられたヤマグワと福島県只見町からいただいたヤマグワを植えました。今では、小さな甘酸っぱい桑の実をつけるほどの木に育っています。“お蚕さん”に寄り添って生活していた村人の気持ちを考えると、桑の木を全滅させてしまった原因を曖昧にはならないと思っています。

研究調査をした結果ではありませんが、考えられることは土壌の違いだろうと思っています。亜硫酸ガスで枯れた植物の滓、その滓が混じった重金属などが含まれた地を全面的に攪拌させて土壌改良しなかった「松木の森」。その地に穴を掘って黒土を混ぜて植えてしまったことが枯らした原因のひとつであると反省しています。地中に生きる分解動物たち

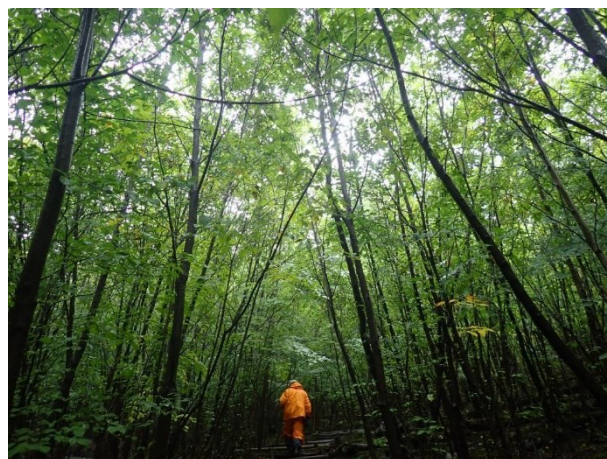


の力が発揮できない悪環境、地中に張り廻らせている草の根による水や空気の流動の悪さ等が問題であったのではないかと反省しています。

「松木の森」ではクスギとコナラ、クリ等が成長しています。春本番を迎える前には枝払いをしますが、そこで目にするのは薄黄緑色の天蚕の繭です。毎年増えている繭を見ることができると、枯らしてしまった気持ちが和みます。

足尾銅山閉山 50 年を迎えて、私たちの生活は森に寄り添っているという現実を見ないふりしないこと、森には負荷をかけ過ぎない生活を心がけること、そして感謝の気持ちを森の手入れとして行っていくということを忘れてはならないと思っています。

森づくりスタッフ 加賀春吾



通信 9 号の本欄 (P.11) で記載の誤りがありました。つきましては下記の取り訂正をさせていただきます。ご迷惑をお掛けしました。

(誤)自然に戻らないものばかりでした

(正)自然に戻るものばかりでした

ミノムシ

東京都日野市が昨年、気候非常事態宣言を出したという話を聞きました。調べてみると、2020年10月にも、衆議院・参議院をはじめ自治体や企業、大学等で同様に気候非常事態宣言が出されていたそうです。気候変動が進んでいることは知っているけれど、何ができるのか？一人では無力ではないか？と思う人もいます。2019年頃からイギリスやフランスで無作為で選ばれた市民が議論をし、その結果を国や自治体の政策に生かす「気候市民会議」が開催され、世界各地で実施されています。日本でも2020年の札幌市を皮切りに川崎市、武蔵野市、所沢市、杉並区等で開催されています。年に数回の会議に参加し、専門家等からの情報提供を受けた後に、グループに分かれて議論をし、意見を取りまとめたり、さらなる議論が必要な課題を出したりする市民活動です。この気候市民会議のメリットは、私たち市民は「自然災害だから仕方がない」というのではなく、間違いなく気候危機の当事者であることから、当事者目線の声を政策に反映させやすくなるということがあります。現在森びと各県ファンクラブでは、日々の暮らしの中で感じている気候危機に対する不安を出しあい、参加者で議論する「お茶会」を各地で実施しています。地域の方々と気候危機の現実を基に、気候危機と向き合う心構えを出し合い、命を守るために何をなすべきかを語り合いたいと思います。

運営委員 小林敬

編集後記

まだ春を感じ始めたばかりの3月、夜中に「ぶーン」という不快な音で目が覚めました。「もう蚊!？」。活動を始めたばかりと思われのちにやたらと機敏で明かりをつけても姿は見えません。あきらめて寝ようとするともまたあの音が近づいてきます。歳のせいか刺されてもそれほどかゆみは感じなくなりつつあるので、せめて黙って血を吸ってくれたら嬉しいのですがそうもいかないようです。明日足尾入りだから朝5時前に起きなきゃいけないのに。。。

それにしても蚊ってこんなに早く出ましたっけね。じめっとした梅雨のあたりから日常的になる気がしていたのに。そういえば、去年は12月になっても似たような騒動があったのを思い出しました。いい加減蚊は一年物と腹をくくるしかないのでしょうか。

東京近郊は温帯ではなく亜熱帯だ、と以前どなたかが言っていましたが、本当にそうなりつつある気がしています。

ことは3月から暖かい日が続きました。例年5月に咲くような花も3月には咲きそろい、白鳥もあつという間に北に去っていき、燕もいつもより早くやってきているようです。温暖化の影響ができていないのは間違いないでしょう。移動できる動物ならこの変化にもある程度は耐えられるでしょうが、遠方に移動できない虫や動くことのできない植物たちへの影響がまずできてきそうで心配です。蚊だって、いたらいたで嫌ですが、いなくなったらそれはそれでとてもさみしいに違いない・・・のです。「3月に蚊と格闘して負け越した」（運営委員 小黑伸也）



森の木魂（こだま）第10号（2023年4月24日発行）〒141-0031



発行：森びとプロジェクト  
 発行人：桜井勝延  
 編集人：森びとプロジェクト編集委員  
 第一版

東京都品川区西五反田 3-2-13 3F 303 号室  
 TEL&FAX 03-6417-3750  
<http://www.moribito.info/>  
 Email info@moribito.info

